

編集後記

「胃と腸」の編集会議が、毎回テーマを決めるために議論沸騰し、時として深夜に及ぶことは前にも書いた。

本号の「胃の良・悪性の境界領域病変」は以前から何度も予定テーマとして候補に上がりながら、その取り上げ方がむずかしく、久しく実現に至らなかったテーマである。

胃癌の診断は、より微小なものを追究する一方で、良性と悪性の境界をどこで見極めるかという問題に直面している。ともに、胃癌のより完全な治療を考える上で極めて本質的な問題であるが、前者は一応診断技術上の努力により解決されるべき望みがあるのに対し、後者は、未だになお解決の方向が定まらず、いわば隔靴搔痒の感をかくせない問題として残っている。

本号は、私達が現在持っている病理組織学的な判定方法、及び基準をもってしては、良性、悪性のいずれにも入れ難い病変、即ち、文字通り境界領域病変を、病理学の専門家に、現時点でどの様に考えているかを—私はこう思う—という形で纏めてもらい、併せてX線、内視鏡の臨床診断を山田、福地の両博士に考案してもらった。

テーマの性質上、病理に重点を置いた編集になり通常とはやや趣の異なった号になったと思う。

裏話めくが、座談会は初めから意見の相違を考え、御出席の先生方には予め御自分の執筆部分を編集部へ送稿して貰ってから開催した。やはり、立場によりそれぞれ微妙な意見の違いがあるようで、あるいはお読みになって、とまどわれる節があるかもしれないが、意見の相違は相違として、それが今後、良・悪性の境界領域病変に対する研究の進歩の原点ともなる問題と理解して頂けばよいと思う。

<村上 忠重>

<編集> 早期胃癌研究会